

卓 話 ●段 克史会員

「日本の伝統文化 花火について」



今回の卓話は「日本の伝統文化 花火について」お話しさせていただきます。

私の事業所は、1894年5月に創業し、今年で130年を迎えます。業務としては、火薬・爆薬販売、発破設計、発破施工、銃砲販売、銃砲修理、銃砲輸入、武道具販売、打ち上げ花火、ブライダルなどの特殊効果花火、イベント演出、イベント企画、3Dマッピング、レーザー演出、

LED演出を行っております。

沿革としましては、初代が屋号を「段銃砲商」として火薬類と銃砲販売で創業し、2代目の祖父が昭和31年に花火の打ち上げ業務を始めました。3代目の父の代で屋号を「段銃砲火薬店」としまして、平成19年に私が事業を承継しました。

平成15年に家業を手伝い始めた当時、事業は縮小傾向にありましたので、最初に着手したのが小売りで増加が見込める銃砲販売でした。

次に事業拡大を見込める花火部門に取り掛かりましたが、既存の現場に営業を掛けるには価格競争に参入するしかないことから、国内の花火会社で使っていただける商品を開発することとしました。元々、メーカーに勤務していたことから、商品設計、開発のイメージがありましたので、比較的短期間で商品を開発することが出来ました。現在では、花火の部品を国内の花火工場の卸すとともに、その内の数社と提携することが出来ております。

さて、テーマとなります花火の話をする前に、日本の伝統文化について少しお話をしたいと思います。そもそも伝統文化とは、古来伝えられている様々な文化のことを言います。

演劇・工芸などの「伝統芸能」、剣道・柔道などの「武道」、ほか「和食」「着物」「建築」「年中行事」「日常生活に溶け込む文化」と大まかに7つに大別されます。

古来、火は畏れ敬われる信仰の対象であり、夜空に火が広がり、ドンドンと大きな音を出して邪気を払い、無病息災を願う為に行われた花火は、「年中行事」の中で育まれた伝統芸能とも言えるのではと考えております。

日本での花火の歴史は、1543年種子島にポルトガル人が漂着し、火縄銃とともに火薬が伝えられたことに始まります。それまで日本では炭などの燃える物はありませんでしたが、火薬（火縄銃）の威力を見た当時の日本人は驚いたことと思います。

1592年 武田氏が火薬を使った「のろし」を考案しました。それまでの「のろし」は、火を焚いて煙で知らせるものであったので準備に時間がかかるという問題がありましたが、武田氏の「のろし」は火薬を使うことで短時間に打ち上げることが可能となり、容易に伝達することが出来る様になりました。

1615年 駿府城を訪れたイギリス人のジョン・セーリスが徳川家康に花火を見せたという事が記されております。これが日本で初めて花火を見たという記録となります。

当時の花火は、筒に火薬を詰めた物で、この筒を固定して点火すると、噴水の様に噴き出す花火であったと言われております。

1617年には、駿府の町で伊勢踊りが流行し、この時に花火を使ったことが記されております

が、この頃には、一般に花火を見ることが出来たという事となります。

1717年 水神祭りで献上花火が打ち上げられます。この花火を打ち上げたのが、鍵屋弥兵衛という人で、現在でも花火を打ち上げられる際の掛け声として「玉屋、鍵屋」と言われる「鍵屋」のことです。

1722年 享保の大飢饉とコレラの流行で大きな被害があり、徳川吉宗が両国川開きの日に水神祭を催した際に悪疫退散の願いを込めて大花火を打ち上げました。

当時の花火は炭が燃える様な火の粉に似た花火でしたが、近代の様に電気の光がない江戸の夜空では、きれいな花火であったと思います。

現在でも、赤橙色の花火のことを「和火」と言いまして、和火系統の花火を打ち上げると歓声が上がりますので、日本人の記憶に刻まれているのかもしれませんが。

江戸時代には、日本の花火の特色である丸い形をした花火が作られており、原型が出来上がっていました。明治に入って海外から様々な薬品が輸入されるようになり、赤、青、黄、緑、紫などの色が加わり、更には薬剤の変化で花火の燃焼温度が上がったことで、今日の美しい花火が打ち上げあるようになりました。

次に、花火の製造工程について。花火の玉は、「玉皮」と呼ばれる器、「星」と呼ばれる薬剤が何層にもなった火薬の粒、「割薬」と呼ばれる花火玉を割って星を飛ばすための火薬、「親導」と呼ばれる導火線で構成されます。

花火は、①配合、②星掛け、③玉込め、④玉貼り、という4つの工程で作られます。

①の配合では、原料となる酸化剤、色火剤、助燃剤を混ぜ合わせる作業となりますが、火薬を取り扱いますので、静電気でも引火しない様に全て手作業で行います。

②の星掛けは、回転している釜の中に核となる1mmの粒を入れて水と糊剤を混ぜ合わせた液状の火薬を振り掛けて少しずつ大きくしますが、1回の振り掛けで出来る層の厚みは0.2mmであり、層が出来る度に天日で干して乾燥させます。乾燥した星に次の層となる火薬を何度も振り掛けるという作業となります。1cmの星を製造するには約2週間という期間が必要になります。

③の玉込めは、玉皮と呼ばれる半球状の紙製容器に親導を取り付け、星、割薬を多摩川の中に詰めて花火玉を作ります。星を均一に詰める技術が必要であり、星と星の間に隙間が出来ると、打ちあがった花火にも隙間が出来てしまいます。

④の玉貼りは、花火玉の外周にクラフト紙を貼り付け、花火玉の強度を上げる作業となります。花火玉にクラフト紙を均一に張り付けては天日で乾燥させ、何層にもクラフト紙を貼る必要があります。

花火の製造は、梅雨時など湿気の多い時期には作業が出来ませんので、花火は作る時も打ち上げる時も天気次第となります。

1発の花火玉を作る為には、大変な手間と時間がかかりますが、夜空に打ち上げた花火は一瞬で消えてしまいます。コロナ禍では日本全国で悪疫退散という願いを込めて打ち上げられました。花火職人は何よりも、一人でも多くの方に喜んでいただきたいという願いを込めて、その一瞬の変化に知恵を絞り取り組んでおり、日本の伝統文化として今後も発展していきます。